

前田家と能【前田育徳会尊經閣文庫分館】



《翁》伝三光坊
- 「石川県立美術館の能面コレクション」より -

■ 石川県立美術館の能面コレクション【古美術】

■ よろこびのかたち【近現代工芸】

■ かな・方寸の美【近現代書】

■ 優品選【近現代絵画・彫刻】

- 展覧会回顧 特別展 まるごと奈良博
- 「寒糊炊き」の公開
- 学芸室こぼれ話
- 1月の行事予定
- 冬期開館時間のお知らせ
- アラカルト ただいま展示中

前田家と能

12月14日(土)~2月3日(月)

12月29日(日)~1月3日(金)は休館

新年のご挨拶

館長 青柳 正規

ちょうど1年前の元旦の出来事は正月を迎えるたびに思い出すことになると思います。科学が発達したとはいえ、自然の力の前で人間がいかに無力であるかを知らされた1年でした。1950年、25億人に過ぎなかった世界の人口は今や80億人を超えるほどになってしまいました。ほんの75年間で3倍もの人口になってしまったのです。人口増加とともにいつの間にか人類は自然を凌ぐ存在であるかのような傲慢さを抱くようになったのかもしれない。しかも、人口増加に喘ぐ世界と、人口減少に苦しむ日本、さまざまな矛盾や断絶が地球の各地で顕在化しつつあります。

それでもわたくしたちは毎日を生きていかねばなりません。平穩無事で、たまには美味しいものを食べたり、旅行や美術館に出かけたいと願っています。ほんの少し日常生活に変化を与えることで、日々の淡々とした生活そのものが生き生きしてくることがあります。

美術館で見た絵の素晴らしい赤と緑の組み合わせに、スカーフの彩りが似ていることに気付かされることもあります。仏像のお顔を見ていると、祖父のごく普通の顔にもどこか奥行きを見出せるような気にもなります。日常の中のちょっとした発見や変化が生活に彩りを与えてくれます。ですから気分を変えるために小さな旅行に出かけたり、寄り道をして公園に行ったりするのではないのでしょうか。石川県立美術館は県民の方々が日々の生活に少しでも潤いを感じ、生活を楽しくするきっかけを見出していただければと願って活動しています。もちろん、この地に息づく工芸や美術に携わる作家の方々がさらに活躍できるようにご協力することはいうまでもありません。当館に足を運んで下さることが私たち県美で働く者にとつて最大の励みになりますので、企画展や常設展にお出かけ下さることをお待ちしております。

加賀藩前田家といえば、宝生流を鼻^{ひな}としたことで知られますが、幕末に將軍となった徳川家斉も、生家である一橋家にならない宝生鼻^{ひな}であったことから、四座(観世・金春・宝生・金剛)の中で宝生流はもつとも隆盛を誇ります。

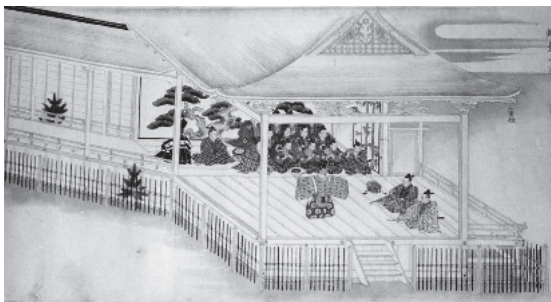
弘化5年(1848)に江戸神田の筋違橋で行われたのが、宝生流15世宝生友干によるのべ15日間の勸進能です。江戸時代最後となった勸進能には、のべ5万7千人が来場しました。この勸進能の様子を描いた刷物は数多く刷られ、人気を集めます。会場周辺や舞台・楽屋を地図のように記した絵図や、空から俯瞰したように描いた全図などが描かれたのです。

絵巻も複数つくられ、静嘉堂文庫や法政大学能楽研究所などに所蔵されています。「舞台之図」はいず

れも(鉢木)の場面ですが、前田育徳会本は他本と異なり、(翁)の場面が描かれています。

家斉の21女・溶を正室として迎えた13代藩主斉泰もまた、能を好んだ藩主でした。斉泰が著した『申楽免廢論』には、幼い頃から父である12代斉広に能を習うものの、はじめは嫌々だったと記されています。しかし年月が経ち、上達するにつれて、その芸道の理を知り、すべてにおいて有益であると学んだとあります。特に、自ら脚氣を病み、それを舞うことによって克服したことから、能の効用を家臣たちに伝えるため、斉泰は『申楽免廢論』を記したのです。

本特集では、能面と能装束などもあわせて、12点を紹介します。



《弘化勸進能絵巻》うち舞台之図

古美術(第2展示室) 石川県立美術館の 能面コレクション

12月14日(土)~2月3日(月)

12月29日(日)~1月3日(金)は休館

学芸員の眼

面には、その役を演じるという以上の力があります。今回展示する《般若》の裏には、赤鶴という面打師が打った「浮木般若」を模したとともに、「海に浮かぶ面を拾い上げたところ、天下が安全となったため、これを掛けて奉った」とも記されています。

面に「光を放つ海中から取り上げた」というエピソードが伴うことは少なくとも、拾い上げた面を大切にすることから奇跡が起こったという言い伝えから、今日でも面を祀る地域もあります。能が完成する以前の面による芸能は、「元来」神に奉納「されていました。

「面は命と同じ」として、能楽師の方々は大切に扱います。かつて展覧会へのご出品をお願いした際に、美術館まで自らご持参くださったことが思い出されます。



《般若》

前号の女面と尉面の解説につづき、今号の美術館
だよりでは、決められた能に用いる専用面やめずら
しい面を5面紹介します。

赤い顔の童子がかすかにほほ笑む《狸々》は、百葉
の長である酒の効用を称える能《狸々》にて用いられ
る専用面です。赤頭に、赤い唐織を上着として羽織
り、袴も赤という赤尽くしの姿で登場します。

苦悩に満ちた表情の《俊寛》は、能《俊寛》専用面で
す。平家政権の転覆を謀り、俊寛は鬼界島へ流されま
す。やがて清盛の娘である中宮が懐妊したこと、から、
恩赦の使いが島へ到着しますが、その中に俊寛の名
はなく、ひとり島に残される怒りと絶望をあらわし
ています。

家から追い出され、盲目の乞食となった青年こそ、
探し求めていたわが子であったという能《弱法師》で

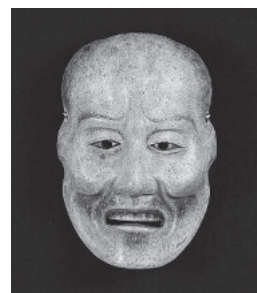
用いられるのが、《弱法師》です。不幸な青年でありな
がら、その表情に悲惨さがなく、清らかさが漂いま
す。

能《殺生石》では、二つに割れた石の中から、狐に似
た妖怪が現れます。他流では「小飛出」を用いますが、
宝生流では《野干》が用いられます。この面袋には「野
干ハ殺生石に限り」と記されていますが、加賀藩の能
の指南役であった宝生弥五郎がこう述べたよう
です。

口を真一文字にぎゅつと結ぶ「へしむ」表情が特徴
の「癒見」の面も複数紹介します。《白癒見》は異種の
ひとつで、眉も白く、植えられたひげも真っ白である
ことから、この名がつけられました。文化8(1811)年
につくられたことが裏面からわかります。



《野干》



《俊寛》

近現代工芸(第5展示室)

よろこびのかたち

12月14日(土)～2月3日(月)

12月29日(日)～1月3日(金)は休館

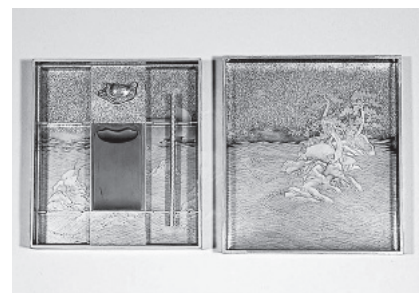
人々は古くから長寿、子孫繁栄、立身出世など様々な願いをこめて、身のまわりを飾ってきました。調度や道具、衣服を含む工芸作品には、おめでたい意味が与えられたモチーフや文様が多く登場します。本特集は、縁起のよい題材や吉祥文様による工芸作品を紹介する内容です。

展示作品から沢田宗沢《蒔絵山水図硯箱》を紹介いたします。モチーフは「蓬萊山」。古来より中国で伝えられ、日本では平安時代にはすでに意匠化されていた吉祥画題です。海中にあり、仙人が住む不老不死の霊山で、正しい行いをする者でなければ辿りつけない理想郷とされました。松竹梅が生え、天には鶴が舞い下には亀が遊びます。松竹梅は冬の寒さに耐えなが

ら生き生きと茂る「歳寒三友」として、鶴亀はそれぞれ千年、万年生きるとして知られ、こちらも縁起の良いシンボルです。

本作では蓋裏に蓬萊山、見込に鶴が描かれています。筆にはやはり縁起の良い七宝文様があしらわれ、吉祥文様、モチーフがふんだんに盛り込まれていることが分かります。

作者の沢田宗沢は天保元年(1830)金沢生まれ。明治期の金沢における代表的な蒔絵師で、細部表現の精緻なことで知られましたが、本作においてもその特徴がよく発揮されています。今回は硯箱の蓋を開け、表裏が見られるように展示をしております。



沢田宗沢《蒔絵山水図硯箱》

近現代書(第6展示室)

かな・方寸の美

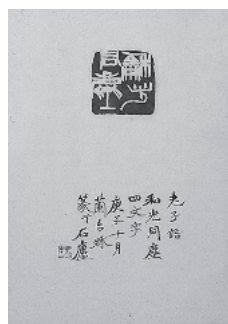
12月14日(土)～2月3日(月)

12月29日(日)～1月3日(金)は休館

篆刻は「方寸の世界」とも呼ばれ、一寸、約3センチ四方の限られた空間の中で、漢字の書体である篆書を主に刻る芸術です。篆刻で扱う篆書は象形文字の要素が強く、時代によって様々な形態がある書体です。篆刻は印の中にとどるように文字を収めるか、自由な造形感覚を駆使して美意識を凝縮させるのが魅力です。印刀で刻られた線は、毛筆で書かれた線より鋭く強い線で、毛筆とは違った線表現の面白さがあります。

篆刻のはじまりは、中国で元時代以降、知識階級である文人らを中心に、書画作品に調和する自分用の印を自ら作るようになったのがきっかけです。明代に入り、篆刻は詩、書、画に続く芸術領域として盛ん

になりました。日本には江戸初期、日本に渡来した僧侶によってもたらされました。彼らは書画と共に、篆刻の技法を多くの日本人に伝え、瞬く間に江戸時代の儒学者や文人の間に広まりました。江戸中期に活躍し、日本の印聖と称された高芙蓉は、これまでにない素朴で力強く格調高い印風で近世の篆刻界を一変させました。高芙蓉の系譜は多くの門人によって明治初期までの篆刻の主流となりました。明治以降は日中の文化人の往来を通して、清朝の最新の作風がもたらされ、日本の近代篆刻の礎が築かれていきました。今回の展示ではその遺風を経て展覧会芸術として独自の近代的な作風を樹立し、発展させていった現代篆刻家たちの作品をご紹介します。



中村蘭台《和光同塵》

展覧会回顧

特別展「まるごと奈良博

—奈良国立博物館 至高の仏教美術コレクション—

令和6年7月6日(土)～8月25日(日)

昨年の夏の思い出は、とにかく「猛暑」「照り付ける日差し」。そして連日多くのお客様が、朝から汗を拭き拭き並んでくださった特別展「まるごと奈良博」です。当館主催の展覧会としては極めて稀ともいえる規模の展覧会でした。なにしろ奈良国立博物館から国宝8件、重要文化財93件を含む200点超の仏教美術がやってきたのですから。その他にも賛否を巻き起こした？映画「スターウォーズ」ばりのポスター・ビジュアル類や、人気投票「推し仏」など多彩な関連イベントも話題でした。

しかし、何より印象に残ることは、その素晴らしい数々の「仏さま」たちを熱心に見入るお客様の姿でした。リピーターが多かったのも本展の特徴のひとつです。3年前にコロナ禍の奈良で開催された「奈良博」三昧―至高の仏教美術コレクションを「まるごと」持つてきた今回の展覧会。「わかりやすく仏教美術の魅力を紹介する、親しみやすい展覧会」のコンセプトの通り、展覧会キャラクターによる解説をはじめ、様々な仕掛けが奏功し5万6千人を超える来場をみたのだと思います。大震災により被災された能登の方々にも多少なりとも「こころの安寧」と「再生へのチカラ」をお届けすることができたのではないのでしょうか。最後になりましたが、奈良国立博物館をはじめ、ご協力をいただいた関係各位に改めて、深く感謝を申し上げます。

そうそう、「推し仏」1位は、「走り大黒天」の別名で親しまれる《伽藍神立像》が、2位以下に断トツの差をつけて獲得しました。



展示中の「走り大黒天」こと《伽藍神立像》

近現代絵画・彫刻(第3・4・6展示室)

優品選

12月14日(土)～2月3日(月)

12月29日(日)～1月3日(金)は休館

日本画は「ハレを飾る」として正月らしい展示をしています。垣内雲麟《旭日稚松図》は一見、床の間のあ家ならありそうな作品ですが、作者に注目してみましよう。雲麟は、江戸時代後期に平安四名家と謳われた絵師のひとり、塩川文麟に学び、石川に来て円山派系の流れをつくった人です。「旭日稚松」は四名家もよくした画題で、石川に円山派の流れを見ることができるところです。

油彩画分野では、塗師祥一郎《山間》にご注目ください。圧倒的な存在感を見せる雪山は大胆かつリズムカルなタッチで、画面下の家々はゆったりとした筆遣いでまろやかに描かれています。塗師が感じた、厳寒の澄んだ冴え冴えしい空気、自然の生命力と集落のかすかな息遣いが、緻密かつ忠実な絵作

りによって伝わってきます。

版画作品からは宮本三郎の《舞妓十二題集》をご紹介します。宮本は「舞妓の中にあるもの、それは日本女性の磨きに磨かれた伝統美の集積」と語っています。舞妓たちの季節ごとの行事に伴う衣装や髪型の変化を、あらゆる角度や視点から繰り返し描き続けた、宮本の人物描写の美しさを堪能ください。

彫刻分野では、裸体像に焦点を当ててご紹介しています。男性像や女性像の筋肉や体のボリューム、なめらかな肌、ポーズそしてシルエツトなど、作家、作品によって注目する点は様々です。展示室に立ち並ぶ作品たちから、裸体像の美をお楽しみください。



垣内雲麟《旭日稚松図》

第7・8・9展示室
第35回
志賀町を描く美術展金沢展

1月23日(木)～26日(日) 会期中無休

第8・9展示室
第33回
石川独立DO展

1月17日(金)～20日(月) 会期中無休

石川独立は、昭和54年に県内在住の独立展出品者を中心にDO展として発足しました。日本のフォービズム(野獣派)の流れを汲む独立展は、東京・国立新美術館で毎年開催されており、今年で91回を数えます。自由で個性強烈な作家を輩出している事で注目を集めています。

18日(土)には批評会も行い、作家それぞれの作品に対する思いが理解できる機会ともなっています。一般の方からのご質問やご意見を伺うこともできますので、是非ご参加ください。

◆出品予定作家

伊藤裕貴・浦野聖菜・大橋結花・大部雅子・
桑野幾子・小山桃花・桜井節子・進地美穂
田井淳・南雲まき・堀一浩・松村裕之

◆入場無料

◆連絡先 堀一浩 電話：090-4326-5849

志賀町を描く美術展は、志賀町の四季を通じて彩りを添える風景・豊かな自然の恩恵を受けて生まれてきた伝統文化や慣習などをキャンバスに描いていただくことにより、志賀町をより多くの皆様にPRする目的で開催しております。例年、招待作品から一般作品まで約90点の洋画・日本画・水墨画・水彩画などの作品を富来展と金沢展の二会場で開催しております。

◆入場無料

◆連絡先 志賀町生涯学習センター

羽咋郡志賀町高浜町カ1-1
電話：0767-32-2970

※青柳会第4回会員展(1月18日～19日)は諸般の事情により中止となりました。あらかじめご了承くださいませよう、お願い申し上げます。

「寒糊炊き」の公開

毎年恒例の「寒糊炊き^{かんのりた}」を開催します。「寒糊」とは、大寒に炊いた小麦粉でんぷん糊です。一年で一番雑菌の少ない寒冷の時期に作った糊を甕に貯え、10年以上冷暗所に保管し微生物の働きで熟成させると、接着力の弱い古糊に変化します。掛軸や卷子など軸装の裏打ちに用いて巻き伸ばしを柔軟にする、文化財の修復に不可欠な接着剤です。

下記の時間帯に自由に見学ができます。ぜひお越しください。

日時 1月20日(月) 9時30分～15時

※申込不要・見学無料

※荒天中止

会場 石川県文化財保存修復工房周辺

協力 (二財)石川県文化財保存修復工房

お問い合わせ 石川県立美術館広坂別館

電話：076-221-8810



過去の寒糊炊きの様子

学芸室こぼれ話

竹内唯(普及課学芸主任)

「美術に親しんでいただくために」

学芸員は様々な分野を経験し、展覧会に関わります。絵画、彫刻、工芸などの展覧会を担当しながら、その都度勉強しつつ取り組んでいます。彫刻の展覧会を担当したときは、配置の参考にするため他館の彫刻展を見に行ったり、見やすいキャプションを見つけたらメモしたりなどして、皆様に興味を持っていただける展示・解説方法のアイデアがないか日々模索しています。2022年に担当した企画展「かねは雄弁に語りき」では、可動性のある金属細工《鉄自在蛇置物》を動かす動画や銅鑼の「音」の展示、デジタル図録の作成を行いました。作品に親しんでいただくために初めて実施してみました。いかがでしたでしょうか。今後皆様と美術の面白さ、楽しさをシェアしていければと思っています。



《鉄自在蛇置物》実際に触ってみた！【石川県立美術館】

鈴木彩可(普及課学芸員)

「奈良出張の思い出」

昨年の夏に開催した特別展「まるごと奈良博」に関わらせていただきました。本展は石川県立美術館で開催した展覧会のなかでも屈指の大きさを誇るもので、5万人を超えるお客様にお越しいただきました。作品の借用や点検では、奈良国立博物館のみなさんのお仕事を拝見させていただきました。どんなところを見ているのか、どんな道具を使っているのか、作業員の方にどんな指示を出しているのかと、多くのことを勉強させていただく贅沢な時間でした。また奈良好きのわたしにとって、2週間ほど奈良市内に滞在できたのもいい思い出です。仕事終わりに興福寺へ参拝したり、博物館の周辺を探索したり。奈良の新しい魅力をたくさん見つけることができました。



奈良国立博物館近くの浮見堂

1月の行事予定

■土曜講座

①「街並みの絵画史(2)日本編」

日時 1月11日(土) 13時30分～15時

講師 前多 武志(学芸第一課長)

②「工芸と吉祥文—よろこびのかたち—」

日時 1月18日(土) 13時30分～15時

講師 竹内 唯(学芸主任)

③「近代版画の口絵について」

日時 1月25日(土) 13時30分～15時

講師 深山 千尋(普及課長)

いずれも会場は石川県立美術館講義室
聴講無料、申込不要

冬期開館時間のお知らせ

左記の期間中、開館時間を変更となります。
引き続き、新年もたくさんのご来館を心よりお待ちしております。

■期間

1月4日(土)～3月20日(木・祝)

■開館時間

9時30分～17時30分(入館は17時まで)

※通常開館時間 9時30分～18時

《富士に群鶴図》 ふじにぐんかくず

八曲一双 縦107.2 横363.4 (cm)
明治20世紀岸浪柳溪 きしなみりゅうけい
安政2(1855)～昭和10(1935)

背の低い小型の屏風ですが、一隻が八曲の横に長い作品です。左隻には、端正な富士の姿を背景に3羽の鶴が飛翔する姿が描かれ、右隻には、三保の水辺で羽根を休める数羽のもとに、一羽鶴が飛来する様子が描かれています。作者の流麗な筆致と確かな写実力が認められる佳作です。

主に絵巻物など、右から左に展開していく例が多い日本美術ですが、本作の場合は、左隻から飛び立った鶴が右隻に飛来するという、「迎え入れる」構図になっており福が次々と訪れる興味深いところです。おめでたい画題です。

作者の岸浪柳溪は、南画家として分類される画家ですが、その作風は、南画の持つ、画技よりも精神性や詩情を重んじるイメージとはかけ離れたものです。それは撤して学んだ師・田崎早雲から、諸派を修めたその師・谷文晁へと遡る教えによるものでしょう。

岸浪柳溪は、安政2年(1855)に仙台藩士の医師の三男として、江戸に生まれました。10歳で仙台藩の絵所に学び、15歳で福島柳圃に、17歳で田崎草雲に入門。内国勸業博覧会等に出品します。明治24年(1891)に来県、以後金沢で画業に専念しました。北陸絵画共進会の若手作家の指導にもあたっています。同34年(1901)は宮内省より「四季耕作図」制作の内命を受け、東京に転居。大正5年(1916)には皇室技芸員に推挙されましたが、耳の患いを理由に辞退しています。

次回の展覧会

令和7年2月8日(土)
～3月20日(木・祝)
会期中無休

前田育徳会 尊経閣文庫分館	第2展示室
天神画像と文房具	浮世絵にみる 魍魎魍魎
第3・4・6展示室	第5展示室
優品選 【近現代絵画・彫刻】	特別陳列 彩塑人形・紺谷力 一躍動する生命— 【近現代工芸】

ご利用案内

コレクション展観覧料

一般 370円(290円)
大学生 290円(230円)
高校生以下 無料
※()内は団体料金
1月6日は第1月曜日より
コレクション展示室無料の日

開館時間

午前9:30～午後6:00

カフェ営業時間

午前10:00～午後6:00

1月の休館日は
1日(水)～3日(金)

石川県立美術館だより
第495号(毎月発行)
2025年1月1日発行
〒920-0963
金沢市出羽町2番1号
Tel:076(231)7580
Fax:076(224)9550
URL <https://www.ishibi.pref.shikawa.jp/>

石川県立美術館は電源立地地域対策交付金を活用して運営しています。

広告

憧れの在宅ワークもできちゃう♪

デザインスクールの
無料体験を
お試しください

子育てママ・パパも
デザインで在宅ワーク♪

デザインを学んでスキルアップ・副業・転職・独立・趣味等可能性を広げよう!!

オンライン講座あり

自宅で学べるデザインスクール

大阪府高槻市城北町1丁目14-17-501 TEL.072-668-3275 運営/株式会社ウィット